



剥製標本、骨格標本を請負製作する 内田晃氏は中大理工学部卒 保存状態良ければ「100年、200年は大丈夫です」



剥製標本と骨格標本の製作請負、「東京内田科学社」(埼玉県三郷市)の内田晃氏(53)は、中央大学理工学部電気電子情報通信工学科(現在学科名)の卒業生だ。取材で同社に入ると、大小さまざまな動物たちと目が合う。といっても、彼ら彼女らは動かないが。

学生記者 片桐将吾(法学部4年)

剥

製製作の舞台裏を教
えてもらった。まず大
きな疑問としてある
のは、動物たちがどこからやってく
るか。

実はクール宅配便を利用してい
た。依頼者から冷凍状態で届き、解
凍して仕事が始まる。言われてみる
と理にかなったことで、他に手はな
いように思えるが、初めて聞いたと

きにはやはり驚いた。依頼主は博
物館や大学の研究機関が多いとい
う。

解凍したら、汚れを洗浄。皮を丁
寧にはいで1枚の皮とする。胴体
の芯材に使うのが同社ならではの
「木毛」だ。

剥製の最大目的である長期保存性
を保証できる優れもので、木材をリ
ボン状にしたもの。かつてはリンゴ

箱に入っていたという。

剥製はそもそも、本当に生きている
かのような高い完成度なので、胴体
が木材という事実に違和感を覚えて
しまう。カエルの胴体は粘土でつく
る。

この不思議な感覚は、自分の目で
見ないとわからない。「生き物とは
何か?」などと考えたくなること、
必至である。

手掛けた剥製を見ながら話す内田氏。手前は製作中のタヌキ





作業過程で大事なのが防腐処理。自然乾燥が最適とされるが、天候によっては夏場でも暖房を使う。内田氏は「しょうがないね、なんて言いながら点火して、対象物には扇風機を当てています」と苦笑いした。作業スペースにある大きなストーブは1年中、存在感を放っている。

防腐処理で最も気を遣うところは、腹部まわりの皮膚と眼球付近の皮膚だという。

内臓も眼球も水分を多く含んでいるために腐敗が進みやすく、持ち込まれた段階で、腐敗に起因する脱毛が起ってしまうこともあるとのこと。

剥製にはガラス義眼をはめる。

皮をきれいにかぶせたら完成だ。完成まで一体にかかりきりになれば約1カ月。剥製とされた動物の内側を見る機会はあまりなかったのが驚くことばかりである。

保存は防虫剤を入れたガラスケースに収納し、直射日光を避けた場所に置くなどの好条件で、「100年、200年は大丈夫でしょう」と内田氏はいう。

依頼主が独自のイメージを要望する場合がある。例えば、猛禽が急降下して小動物を捉えるシーン。内田氏が要望を図案化して相談する。

こうして決まった完成形イメージをもとに、いかに本物を再現できるかという観点から、多くの工夫がなされている。

前職はソフトウェアのエンジニア

どのようにして、剥製製作の世界に入ったのだろうか。

同社創業者の父は事業所兼自宅で仕事をしていた。物心つく前から、数々の剥製が身近にあった。幼い時分にも、よく手伝いをしていたという。

狩猟が盛んだった30年ほど前までは、剥製の製作依頼も数多く寄せられた。「忙しい父を手伝う」と決心するまでの内田氏は、中大卒業後に就職した大手企業で働くコンピュータのソフトウェア・エンジニア。

パソコン開発が進み操作がスムーズになって、一般社会からも、もてはやされるようになった頃だ。大学や研究室で学んだ集積回路などの研究を生かせる最先端の職場にいた。

剥

製の仕事に転身した、ある日。衝撃的な出来事があった。

出張先の山口県で、アムールトラの剥製修復を行っていた。

「歯」を磨いていたところ、現れたのはなんと「木」だ。その昔、人の入れ歯は木製で、剥製の木製歯は異例中の異例。

「作ったのはおそらく入れ歯師が能面をつくる人だと思います」(内田氏)

アムールトラの前歯や顎はきれいにできていた。木でそこまでの完成度をあげるのは容易ではない。先人の技術には大変なものがあったのだ。

剥製技術とその文化が日本に受容されたのは江戸時代といわれている。私たちが学校で習った、ドイツの医者・博物学者のシーボルトが長崎で広めたそうだ。よって、わが国の剥製製作は基本的にはドイツ式。

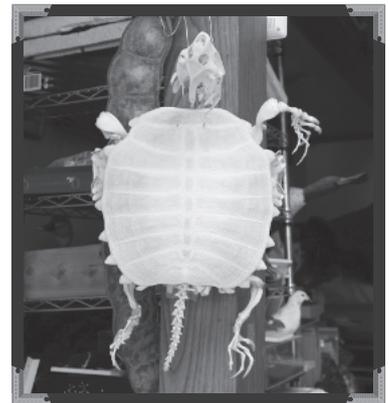
ところが、この世界に教育機関はない。内田氏によると、教科書はあるにはあるが、50年ほど前の記述。いまでは現実的ではない事例も多く、あまり実用的でない。

それゆえに、完成形までの手法には個人差があり、プロが見れば誰が作ったか、見当がつくこともあるという。工夫において、個人の技術裁量は大きく、だからこそ、難しいのだ。

東京内田科学社は、中大多摩キャンパス近くの多摩動物公園(東京・日野市)に複数の標本を納めている。

昨年4月には、よこはま動物園「ズーラシア」(横浜市)に「オカピ」の剥製を納めた。キリン科ながら体長2mほどで、外見はシマウマに似ている。オカピの一般公開は1999年、同園が国内初だったという経緯がある。

いまや絶滅危惧種とされ、本種と共に剥製として歴史を刻む。内田氏は歴史の伝承者でもある。



編集後記

■ 中大の縁

内田氏はヒョウの剥製修復も手掛けた。戦時中、野生のヒョウが中国戦線で戦う日本軍兵士と共に過ごした。人間に慣れたヒョウは「ハチ」と名付けられ、大いに話題になった。その後、その兵士の故郷・高知県で剥製とされた。

ハチを題材にした著書がある作家・門田隆将氏は中大OB。内田氏によってリメイクされたハチは7月に新装なった「オーテピア高知図書館」(高知市)に移った。

スッポンとカメ

教えてもらった知識を一つ紹介しようと思う。スッポンとカメの甲羅の違いについてである。

スッポンの骨格標本を見てみると、甲羅(背中)と腹部が離れている。

カメは甲羅と腹部がくっついていて、背骨がしっかりあった。

スッポンもカメも同じようなものだと考えていた筆者は、これを知ってとても驚いた。ここでの学びはとてもおもしろかった。今度、博物館や動物園に行ってみようと思っている。舞台裏を知ると、舞台の見え方が変わってくるものだ。(片桐)



内田氏の説明を聞く学生記者(左)